

中国での文字の「読み」は、日本とは異なる角度の重層性を有する。それは、文読・白読といった語彙に付随した「読み」の違いのみならず、方言や正音・俗音などの位相、詩文や経書など、媒体の特性に叶った読音などとして現れる。

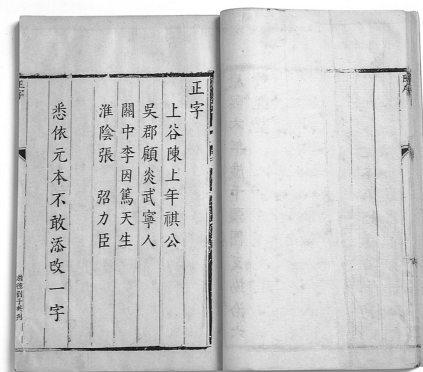
思うに、中国で字音の正統性が議論されるのには、それ相応の時代的な機運が背景にあるようだ。中国で最初の系統的な発音字典(韻書)として『切韻』が編まれたのは隋の仁寿元(601)年、南北朝の長い中国分断時期をようやく統一に導いたこの隋朝は、北方の異民族「鮮卑」をその出自にもつこともあってか、中華の「正統」を継ぐ立場を内外に示すことに意をくだいた王朝であった。

さて、『切韻』は正統な字音を決定するための規範として大きな影響力を有したが、増訂本が続々と世に問われるに伴い早くに原本は失われ、最も早い時期に属する増訂本『刊謬補缺切韻』(708年)が1948年に故宮で発見されるまでの間、その音系を知るには宋の大中祥符元(1008)年に編纂された『廣韻』に拠るより方法がなかった。

写真は、京都大学文学部貴重書の符山堂版『廣韻』で、清の康熙六(1667)年、陳上年・顧炎武らによって明内府本の体裁を忠実に襲って重刊された、いわゆる略本、十二行本の系統に属する版本である。それより三十七年後に刊行された現行澤存堂本の、詳細な注釈と精緻な筆

跡に見慣れた者にとっては、収録字数も注釈も簡素な符山堂刊本の肉太の文字を目にすると、些か物足りない思いを抱くかも知れない。しかし、原本『切韻』の姿が失われて久しいこと、また当時通行の『廣韻』すら俗本による誤りが蔓延して正しい「読み」を伝えないこと、それを憂慮する顧炎武の志を受け古本『廣韻』の体裁を忠実に復元しようとするなど、などが綴られた陳上年による序文を読むうちに、中国古典の核心を支える命脈の太さ、そのエッセンスが肉太の文字一つ一つに宿るように思われて来るのである。

木津祐子(中国学分野・京都大学)



符山堂版廣韻(京都大学文学部貴重書)